

第1回群馬県少子化対策推進県民会議 結果の概要

1. 日 時 平成21年2月13日(金) 15:30～17:30
2. 場 所 群馬県庁7階 審議会室
3. 出席者 会議資料中の出席者名簿のとおり
4. 議事概要

○議長

難しい課題を抱えた会議の会長ということで、責任の重さを痛感している。皆様のご協力を頂きながら、現時点で最善と考えられる案をまとめていきたい。

日本の人口は縄文時代の昔から増え続け、平成16年がピークではあるが、我々は、今、日本民族が最も栄えている時代に生きている。ただ、平成12年の1.36という合計特殊出生率が今後も続くと仮定して計算すると、約200年後には我が国の人口が1,000万人、ちょうど応仁の乱の時代と同じくらいになってしまうと予測されている。

一方、日本の国力や面積などから、適正な人口がどれほどであるか、という話はあまり目にしない。世界の人口はどの位が適正か、群馬県ではどうか、といったこともあまり聞かない。それは様々な要因が係わる大変難しい問題であるからだと思うのだが、考えなければならぬ重要な問題である。少子化対策も考えなければならぬことが多い、非常に難しい問題である。例えば、結婚の問題がある。結婚しない、子どもを産まないという人がある。そういう人に対し、経済的にどうしていったらよいか、生き方・考え方はどうしていったらよいか。また、国がやるべき事、県がやるべき事、市町村、民間、個人がやるべき事など役割分担の問題もある。短期でやるべき事・中期でやるべき事・長期でやるべき事といった事も考えなければならぬ。

事務局の方で資料も用意されているようだが、出来るだけ委員の間で共通認識を持った上で、実りある成果が出せるよう、ご協力をよろしくお願いしたい。

(事務局の資料説明)

- ①資料1の「総合的な少子化対策推進体制イメージ図」について
- ②資料2の「群馬県の少子化関連指標」について
- ③資料3の「群馬県の少子化の現状と取組み」について
- ④資料4の「少子化対策推進県民会議の進め方(案)」について

○議長

少子化対策につき、興味深いデータが事務局より示された。また、既に様々な対策がなされているが、それらがあまり効果が上がっていない状況が改めて認識されたように思う。これから2回、3回、4回とそれぞれテーマを絞った会議が予定されている

ようなので、今日はテーマを絞らず、事務局の説明に対する質問や、日頃少子化対策について思っていることを、特にテーマを絞らずに意見交換したい。

○A委員

資料3で、将来の出生率や生涯未婚率など、現状のままだと「こうなってしまう」という未来完了形のデータが示されているが、求められているのは現状をどう変化させていくかということであり、そのためには適齢期世代の生活や考え方など、現状での原因を明らかにすることなのではないか。「こうなってしまう」と不安をあおるより、現状を冷静に分析する方が必要と考える。

○B委員

自分は結婚などするまいと思っていたが、いつの間にか3人子どもが出来ていた。

子育てより子作りが大変なんだと思う。未婚化・晩婚化の進展や結婚・出産費用の増大などは大きな問題。今後は結婚・出産の部分に光を当てていく必要がある。

子育て以前の問題は中々やりづらい。やるならどう支援していけるのか、それをこの場で考えたい。

○議長

現今の経済情勢下で、どんな対策を出していけばよいか。たとえば、お葬式では「新生活方式」が定着しているが、結婚式では普及していないのでお金がかかる。

○C委員

子どもが病気になると、働いているお母さんも休まなければならない。病後児保育ではお母さんが休みづらい。それなら、子どもが病気にならないシステムにすればよい。つまり、予防接種が大事である。アメリカなどでは日本より多くの種類の予防接種があり、多くの人が利用しているが、日本では任意の予防接種には補助金も少なく大変高価である。そこで、多くの予防接種に補助金を出してはどうか。前橋・高崎では来年度から1回当たり3,000円の補助が始まるが、随分助かると思う。今後全県下に広めて欲しい。産めよ増やせよ、も大切かも知れないが、子どもが健康に一生を過ごせるようにすることも、間接的に子どもを増やすことに繋がると思う。

○D委員

2月の初めに群馬県保育研究大会があった。「すべての人が子どもと子育てに関わりを持つ社会の実現をめざして」というのがメインテーマ。安心して子どもを産み育てられる環境をサポートしないとイケない。教育の中でも、先祖から続いている命を大切にすることを盛り込むべき。また、それを次の世代に受け継ぐ責務がある。

○E委員

子育てヴィジョンの100ページに、次世代育成支援対策の理念として第3条「…父母その他の保護者が子育てについての第一義的責任を有する…」とある。産みっぱなしではいけない。今日の会議は厚生労働省関係で開催されているようだが、厚労省だけでなく、教育も入れる。保護者の視点に立った意見が欲しい。

○F委員

資料提供をさせていただいた。私が所属する団体は1989年に発足し、毎年様々な意見、要望を提案させていただいているが、そのバックデータとして「県民意識調査」を行っている。2008年には直接の調査項目はなかったが、2007年には子育て環境に関する調査を行った。先ほどの話にもあったように、子どもが病気をしないようにすることも大事だが、病気になってしまったときなどは、親が子どものために休暇を取れるような労働環境作りをするのが労働組合の役目。

○G委員

児童館などで子どもや子育てをしているお母さん達と接する機会が多いが、話を聞くと、若い人は子どもを欲しがっている。出来れば2～3人。でも仕事が抜けられないとか、色々問題がある。

東毛に住んでいるが、東毛は病院が少ない。どこの産科で産むかが大きな問題。産科・小児科の充実が非常に重要。

○H委員

民生委員は最近児童館活動を熱心にやろうと呼びかけている。全国でやっている4ヶ月までの赤ちゃんの訪問事業だが、高崎ではやっていない。先日、全国民生委員の大会が大阪であった。印象的だったのは「命はつながりの中に」という講演。命は何億年も前から受け継がれてきている。その命をもっと増やそう。産まれてきた後の支援も大切だが、産まれる状況づくりも大切だと思っている。子育てが大変だから産まない、という人はあまりいないように思う。新聞などを利用して、「子育ては楽しい」というメッセージを発信してはどうか。

○I委員

医療の現場では看護職がずっと不足している。質の高い医療を提供するにはそれだけの看護職が必要。看護職自身が未婚の人が多いが、休日何をして過ごしているかと言えば、毎日の勤務がハードすぎ、外出せず休養している。働き続けるためには、きちんとした職場環境作りをしなければならない。子育てをするためには男性の育児参加が必要だが、看護職のパートナーはとても協力的。

少子高齢化は看護界にとっても非常に大きな課題。18歳で看護学校に入って看護職になるというのが一般的だが、供給される人材が減ってしまう訳だから人材の確保が必要になる。一方で、高齢化のため仕事は増えていく。

○J委員

年々、地域・家族の支え合いが無くなってきている。これが結婚から子育てまでの中で一番大きな問題ではないだろうか。非正規社員、派遣、ニート、フリーターの対策も政府では先日閣議決定したところだが、根本的には、親になるとはどういうことか、をこれから考えていく必要がある。青少年が自立して生きていくためには家族や地域の支えが要るが、個人情報保護法が近所づきあいに悪い影響を及ぼしている。役員も子どものことを知らないような中で、地域の絆と言っても難しい。

○K委員

企業側から考えると、女性を主たる労働者として受け入れ始めたことが一番大きい。女性が社会進出を果たし、新しい時代の幕開けを迎えた。反面、出産・育児に関しては女性の負担が極めて大きい。企業もサポートするが、あまりにもコストが掛かる。大企業だけでなく、中小の従業員も同じようなサポートが受けられるよう、社会的なインフラが必要。

○L委員

労働相談を分析したところ、結婚でやめる女性は少なくなっている。しかし、妊娠すると正社員からパートになってくれといわれたり、やめてくれと言われる人が昨年同期の倍以上に増えている。

トップが女性を積極活用して行こうというところは良いが、そうでないところは、妊娠した女性をマイナス要因としか捉えていない。相談に際し事業主の名前を明かせば事業主への指導もあるが、そうすると相談者が引き続きその企業で働くことが難しくなってしまう。事業主には、短期的なデメリットだけでなく、出産した女性が職場に復帰して一層力を発揮するという長期的なメリットをぜひ理解してほしい。

○M委員

県議会においても、毎回、子育て・少子化の問題で相当色々な議論がなされている。

現在は100年に一度の経済不況で、これをなんとかしなければいけないが、少子化対策も、それに匹敵するくらい大きな問題。

知事が最重要課題と位置づけ、少子化対策推進本部やこの県民会議が出来たものと思うが、ここで出た議論など、議会で活かせるものは活かしていきたい。

子育ての経済負担が大きい。また、子どもを産む前の支援、これから産もうとする

世代の支援がこれから大事だと思う。

○N委員

派遣労働者に農林業に従事してもらい、農山村の活性化を図る、というような産業構造の転換が今始まっているが、そうしたことと少子化対策を併せて考えていかなければならないと思う。また、群馬県は大泉や太田に代表されるように外国人労働者については先進県であるが、移民政策のようなことと少子化対策も関連させる必要があるのではないか。例えば飛鳥時代には渡来人が来て日本を繁栄させてきた訳だが、そういうことも含めて大きなスケールで考えなければ方向性が見いだせないのではないか、と深刻に考えている。

○A委員

行政の役割はこのような話し合いの場を設営することと心得ている。行政が旗を振っているだけでは問題は解決しない。

また、今問題になっているのは35歳前後の人たちの問題。老若男女と言うが、若い男女がどのような働き方をしているか、またどのような生活をしているかが見えてこないと問題は解決しないように思う。

○議長

活発な意見発表をありがとうございました。事務局にお願いですが、次回以降の会議では、資料を事前に送付して欲しい。委員さん方の意見対策に時間を割きたいと思うので、よろしく願います。